

D-21 集合住宅地のゴミ処理に関する研究

京都府大生活科学 ○所田玲子

奈良女大家政

今井範子

西村一朗

足田洋子

扇田 信

目的 前報告で 家庭ゴミ処理の持ち出し方式は、収集側にとっては、多少とも問題解決になったが、居住者にとっては、なお多くの問題を残していることが明らかとなった。

今回は、ダストシュート方式を継続しているものを主として、家庭ゴミの処理方式についての意識、ならびに実態を調べ、そのあり方を考えることを目的とする。

方法 大政府下全域の府営、公園の中層住宅のゴミ処理の実態を調べ、その中からダストシュートを使用している所、閉鎖している所を選び出し、アンケート調査を行った。調査時期は、昭和54年2月下旬～3月中旬、および7月上旬である。

結果 ①ダストシュート使用中の団地では、5割前後の居住者が、「ダストシュートの使用継続をのぞむ」としてあり、閉鎖した団地においても、「使用継続ができればよかった」が、5割以上を占めていた。また、「当団地に限らず、一般的に集合住宅には、ダストシュートが必要だと思ふ」層が6割強を占め、「不必要」は、1割弱であった。②ダストシュート方式によるゴミ処理管理のためには、「ダストシュート利用上の規則を守ること」を大切にするものか、各団地とも5割前後を占めており、とくに高率であった。居住者間の地域生活管理への参加のしかたか、収集者側の問題や、設備の内容など物理的な問題に優先して重要であることがうかがえる。

* 第28回 日本家政学会総会

本報告は、昭和53年度文部省科学研究費補助(研究代表者、奈良女子大学教授扇田信)を得て行なった研究の一部である。